

2010年度 第26回

在日アジア人留学生への研究補助

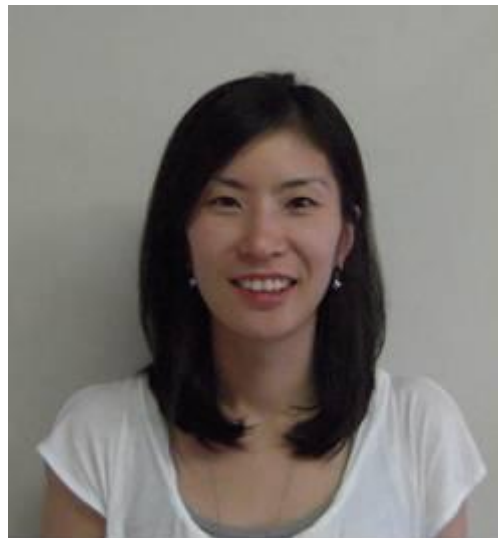
受給生紹介



東京・三田の慶應義塾大学にて

RASA－アジアの農村と連帯する会
Rural Asia Solidarity Association

氏名 李 惠珍 (LEE Hyejin) |
国籍 韓国
大学 一橋大学 社会学研究科
博士後期課程 4 年



(留学目的)

移住労働者支援 NGO でのボランティア活動などを通じて、移住労働者のおかれた環境・問題は、韓国人個人々の認識の問題とともに、政府の政策に起因する問題であることを知った。韓国政府のとした外国人労働者政策である「産業研修制度」が日本の外国人研修生制度をモデルにしたものであること、各地の自発的・ローカルな支援団体の活動・運動が、在日コリアンの差別撤廃運動や部落解放運動といったマイノリティ運動との深い関係性をもっていることから、より深く研究したいと考えるようになった。また、自分の生まれ育った国（韓国）を離れて、日本に住むことで（勉強することで）、「外国人」という当事者の立場から「移住労働者問題」を捉えてみたいと考えたからである。

(研究課題)

私は、市民社会・運動と国家の関係性に一貫した関心を抱えており、その意味で韓国・日本の外国人政策に対して積極的に問題提起・批判し、市民的代案を提示しようとする支援団体・運動は、国家と市民社会の関係性だけでなく、国民国家に囚われない連帯形成の場としての市民社会をみるうえで戦略的な価値をもつと考える。そこで、日本の支援 NGO でインターンを務めながら、ユニオン・ネットワークでスタッフに近い立場から参与観察を続けている（2008 年 4 月から）。また、韓国においても 2008 年から NGO・労働組合活動家に聞き取り調査を行ってきた。これまでの調査をもとに、「韓国・日本の外国人移住労働者政策と支援運動」というテーマで博士論文の執筆に取り組んでおり、外国人・移住労働者当事者への聞き取りや受け入れ社会との関わり方について追加調査を行う予定である。

氏名 Luvsantseno Togosmaa
(ルアサンゼン トゴスマ)
国籍 モンゴル
大学 神戸大学 海事科学研究科
博士課程



(留学目的)

モンゴルでは民主化後の数年間で、生活に密接に関連する身近な水汚染や大気汚染をはじめとして様々な環境問題が生じている。環境問題を解決するために、環境科学を深く学びたいという強い関心を抱いた。日本は環境問題を解決してきた先進的な歴史を持っており、環境科学分野では世界の最先端である。そこで、日本で博士号を取得し、習得した知識をモンゴルの環境問題の解決に、また持続的な発展に役立てることを目的として来日した。

(研究課題)

修士課程では日蒙の環境問題に関して環境教育の視点から修士論文をまとめた。博士課程では、廃棄物最終処分場からの浸出水、防汚剤によって汚染された水・底質などの汚染の評価にバイオモニタリングを活用した研究を進めている。

氏名 蔡 文賓 (サイ ブンヒン)
出身 台湾
大学 東京大学 教育学研究科
修士課程 1年



(留学目的)

来日前、私は台湾で二年ほど仕事をしていた。仕事のかたわら、語学力とパソコンの技術をさらに向上させるために、夜、コミュニティ大学で勉強していた。そこで、先生達の教えや各雑誌などの情報から、生涯教育システムは台湾より日本の方がはるかに進んでいるということがはっきりとわかった。日本の生涯教育は内容や種類が豊富で、専門的である。日本と比べると、台湾の生涯教育システムは不十分であることを知った。その時から、生涯教育のことに関心を持ち、生涯教育に関して勉強したいという思いが強まった。日本の良い点を学びながら、将来充実している日本の生涯教育システムを台湾に取り入れていくにはどうしたらよいか学べると思い、留学先に日本を選んだ。そして、東京大学に進学した理由は、各分野の優れた教授陣が学生を指導し、学術的に多角的な視点から研究を進めるのに最適な環境だと思いながら、生涯教育システムに関する専門的な学問と分野をさらに研鑽しようと強く決意したのである。

(研究課題)

早稲田大学の卒業論文に取り上げた「日台外国人花嫁問題の比較研究～生涯教育の視点から～」を軸にして考察を行った。その次、大学院において取り組みたいテーマは、大学の卒業論文に軸を置きつつも、日本や台湾における外国人花嫁に対する語学支援及び社会支援のデータベースが修士課程の研究テーマである。「小集団形成の学習の視点から生涯学習を研究する」と相まって、生涯教育と関わる集団学習を幅広く、深く研究しようと考えている。それで、小集団形成の学習に関する衆論のデータと知見を基に対象を拡大し、交接して行こうとします。小集団形成の学習は、生涯教育に如何なるメリットをもたらすか、または如何なる生涯学習の土台に行うべきかについて研究をしようとする。

氏名 Balasooriya Balasooriya
Appuhamilage Chaminda Ajith
(B. B. A. C. アジット)

国籍 スリランカ
大学 広島大学 国際協力研究科
博士課程 1 年



(留学目的)

私は平和構築学の Ph.D.をとるために広島大学に来ました。スリランカにおける過去の津波と 30 年続いた紛争によって、スリランカでは国の再構築と発展のために有能な人を必要としています。特に平和構築学の分野はスリランカの大学では学ぶことが出来ません。そのため、私は平和構築学の研究を続け、現在のスリランカにとって重要な知識と経験を伝えたいのです。最後に、私はこの新しく得た知識と経験を学生や市民に気付かせることで、政府などと貧困者とをつなげる架け橋を作ることが出来ると信じています。

(研究課題)

私の研究は紛争や紛争の後に社会が受ける影響について学ぶ平和構築学に基づいています。特に私は紛争後のスリランカにおける若者の社会的・経済的・文化的問題を解決するために平和構築学を若者のコミュニティーに適用する方法に着目しています。さらに、スリランカにおける長年の紛争によって受ける若者への根本的な影響についても注目しています。最後に、私は紛争によって生じる若者達の問題を解決する方法を構築することが出来ると考えています。

氏名 潘 曉丹 (ハン ギョウタン)
国籍 中国
大学 埼玉大学 文化科学研究科
博士後期 3年



(留学目的)

私は子供のころから、歴史が好きで、戦争の遺跡と、その時代の人たちの暮らしや文化などに関係する本をむさぼるように読んだ。日本と中国の間には、過去 2000 年の交流の歴史があり、確かに近代に入って不幸な時期があったが、それは 2000 年のつながりから見れば短いものだと思う。日本で歴史学研究方法を学んで、博士学位を取ってから帰国したい、出身母校である哈爾濱師範大学に戻って、引き続き歴史学の研究を続けるとともに、国際友好・平和・共助、という理念を学生らに教えたい。

(研究課題)

現在、「東北労働者の戦時徴発と地域社会の変容」ということを研究テーマとしてやっています。主に「満州国」を中心に研究しています。具体的に、東北労働者の戦時徴発に対し、満州国の崩壊までの歴史の流れから其の由来を分析し、東北地域社会の政治・経済・生活にどのように変容をとげたかを明らかにしたい。

氏名 **Wariki Windy Mariane Virenia**
(ワリキ・ウィンディ・マリアネ・
ヴィレニア)
国籍 インドネシア
大学 東京大学 医学系研究科
博士課程 2年



(留学目的)

インドネシア保健省の保健センターで意志として務めていた間に、母国に存在する保健に関する問題（特に母子保健と熱帯性の疾病問題）の深刻さに気が付きました。これらの問題解決に役立ちたいという思いで留学を決意しました。日本で熱帯医学について学ぶために、東京大学大学院に留学するため来日しました。

(研究課題)

博士課程では、薬剤耐性マラリアを研究テーマにしています。研究の題目は「インドネシアでの熱帯熱マラリア原虫と三日熱マラリア原虫に対するアーテメター／ルメファントリン合剤とジビドロアルテミシニン／ピペラキン合剤の効果についてのランダム化臨床試験」です。

氏名 烏力吉瑪（ウリジマ）
国籍 中国（内モンゴル）
大学 東京大学 人文社会系研究科
博士課程 3年



（留学目的）

私の研究の主体は、チンギス・ハーン祭祀である。チンギス・ハーン祭祀は、中国内モンゴル自治区のオルドス地域に七百年以上にわたって行われている。私は、中国での修士課程において民俗学の視座からチンギス・ハーン祭祀を研究し、論文を書いた。その後、チンギス・ハーン祭祀を全面的に分析するにもっと適した研究方法が必要だと感じた。世界の先端にある日本の学術的な新しい研究方法を学んで研究に応用し、その成果を通じて母国の学術分野に貢献できればと考えて来日した。来日後、興味深い日本文化と日本人の精神を母国の人々に紹介するために『茶の本』（岡倉天心）をモンゴル語で訳して出版した。学校訪問と市民講座を通じて、日本国民に母国と民族の文化を紹介するなど両国の文化交流に積極的に参加している。静岡大学にいた時に、静岡県知事から「ふじの国親善大使」に任命された。

（研究課題）

私の博士課程における研究テーマは『モンゴルの祭祀者集団に関する研究—特に清代におけるチンギス・ハーン祭祀を中心に—』である。モンゴルが清朝に統合されてから、チンギス・ハーン祭祀も大きく変容した。清朝はチンギス・ハーンの歴史を再解釈し、その祭祀者集団を再編した。清朝以来の祭祀者集団の牧地所有、牧地売買、それに対する人々の反応やダルハド人の人口変化など特殊な集団の具体的な社会変動を『金書』、清朝時代の公文書および現地調査の資料を利用しながらその実態を解明することは、私の研究目的である。実際に研究する時に、歴史学的な文献研究と歴史人類学的な手法を併用しつつ、徐々に進めている。

氏名 金 善旭 (キム ソンウク)
国籍 韓国
大学 東京大学 工学系研究科
修士課程



(留学目的)

大学卒業後、会社で文化財の安全診断の担当になって、興仁之門（俗称：東大門）、崇禮門（俗称：南大門）、景福宮勤政殿など25ヶ所の文化財に関して安全診断を行いました。韓国では何回も文化財の安全診断を行った経験がありますが、仕事の内容ではまだ明確な資料とか基準による結論ではなく現場での経験と調査された現状による、あまり正確なデータによる結果ではありませんでした。以上の仕事の経験から、わが国においては歴史的、美術的観点からの資料は十分であるのに、工学的資料などはとても足りないのが現状であることを知りました。また、現場での経験と調査により結論を出すには、自分の力量が不足していることも痛感しました。それで、仕事を続けるのに限界を感じて日本留学を決心するに至りました。

(研究課題)

現在、文化的に重要で価値がある伝統木造建築物において、このような劣化現象が発生していて、補修や補強などの対策が立てられているが、確かな構造的な特性に対する評価が不十分な状態です。それで、本研究では劣化現象と構造性能との相関関係の究明を通じて現場で実施される適切な評価基準と評価方法を提示して、これを木造建築物の構造解析における基礎資料で使うことができるようにすることを目的とし、また構造部材の補修、復元、再建及び維持管理の際、必要な安全性の側面の基礎的な理論資料を提示して、今後の文化財保存において、より科学的で客観的な資料を提供して、木造建築物の構造性能及び残存性能評価のための基礎準備を目的にします。

氏名 李 吟京 (リ リョンギョン)
国籍 韓国
大学 立教大学 法学研究科
博士課程 6年



(留学目的)

韓国で多くの当事者達に会う中で、沈黙を強いられた人のための研究の必要性を認知し、研究を進めてきた。ところが、これまで自分が会ってきた人たちは韓国に住んでいない人であって、故郷から出ざるをえなかった人の「声」はそこにはなかった。それ故に、自分の問題意識を「韓国」という社会の外まで広げ、「国」と「民族」からも離れてみたかった。その際、今日まで朝鮮半島とどの国より歴史的に関係が深い日本への留学を決心するようになり、韓国と日本の関係史、人の移動に関する研究を行っている。

(研究課題)

上記の問題意識から、1948年前後に起きて3万人の人が虐殺された「済州島4・3事件」をきっかけで、日本に渡航した済州島人家族の離散史と記憶に関する研究に取り組んでいる。当事者らの聞き取り調査と文献資料の調査を通じて、韓国社会から離散を余儀なくされ、戻りたくても戻れない家族の歴史に立ち入り、いかに人が移動して離散するようになったのか、そしてその中で「済州島4・3事件」をめぐる記憶はいかに排除・忘却されてきたのか、いかなる形で再構成されてきたのかを考察する。このアプローチは「国民」・「民族」では把握できない、歴史の示唆点を与えてくれるだろうと思っている。